

3 「人間関係原論」のキリスト教的背景

市瀬英昭（南山短期大学助教授）

（一）「原論」と宗教的人間

関係、かかわり、出会い、人間ということを経験的に理解すること、そして社会のなかでチェンジ・エージェントとして生きてゆける人間となることを目指す人間関係科には、当然に体験学習がふんだんに取り入れられている。物事を体験し、指摘し、分析し、仮説化するという循環過程によって学びを得るという方法である⁽¹⁾。ここでは学ぶことと生きることとはひとつであるという理解が全スタッフに共有されていると言える。自分で自分を見直す（ふりかえり）ことと他者からの指摘によって自分を見直す（わかちあい）ことがいろいろな形で提供されているのもそのためである。しかし、この方法自体に関してもときに反省し「ふりかえる」必要があろう。そうでなければ、関係科の本来の意図に反して他者とのかかわりを分断するということにもなりかねないからである。二年間の必修で課される「原論Ⅰ、Ⅱ」はその意味において体験学習自体を整理し統合することを大きな目標にしている。反省のみが前面に出ると生気を失うが、反省のないところにはまた進歩も深化もないであろう。カリキュラム刷新の結果の生まれた原論は、このように体験学習の方法自体にもメスを加えるものとして機能しなければならぬ。一回に百余名の学生を対象にして四名のスタッフがかかわりながら創り出されるこのコースで各スタッフはそれぞれの専門領域からの発言を期待されることになる。私は主に哲学、神学そして宗教という、いわば「固い」切り口から発言し、かかわった。もっとも、固いのはその名称だけであって、人間が共に生きていくことを考えさせ、励まし、その後押しをするものとしてはしなやかなはずである。

古来、人間はいろいろな側面からその定義がなされてきたが、そこには人間

を宗教的存在と捕らえる可能性もある。ここでは宗教現象について二つのことだけを確認しておきたい。第一は、宗教という言葉の諸次元を整理することの必要性。第二は、本来の意味における宗教が一それはいわゆる「心の病んだ人」が必要とするのだという一面的な理解あるいは「偏見」から解放されて一すべての人間と世界のあり方にかかわる問題だと認識することの重要性である。

前者に関しては、宗教という言葉にしる、レリギオ (religio) の用語にしる、そしてそれらの語源がどう解説されるにしる⁽²⁾、そこで大切なことは人間の宗教性という見えない次元とそれが具体的な形となって現われた次元とを区別し関連づけることである、と言うべきであろう。通常理解されている意味でのひとつの宗教 (= 宗派) が真理そのものを排他的に所有していると主張することは原理的に不可能である。というより、人間にはそのような発言をする権利は端的にないのである。個々の具体的な宗教は自らがどのような機縁をもって根拠 (= 超越) にかかわっているのかを誠実に反省しその独自性を掘り下げること⁽³⁾、そしてそのような制限を自覚しながら他の特長をもつ宗教と共同しつつ、真理そのものを明らみに出す努力をすることが求められているのである。このような普遍的な次元と具体的な次元との区別と関連はそれぞれの宗教の文脈においても理解され深化させられるべきであろう⁽⁴⁾。

後者に関しては次のように言えよう。たとえ、個々の宗教が人間が内的に自らの限界を自覚したとき、または外的に自然の力に圧倒された結果として発生してきたとしても⁽⁵⁾それらはそこにとどまらず、人間とは何者なのか、生きるとは何なのかといった究極的な問いに関わることになる。個々の宗教は人間、世界がその本来の姿を実現してくときの励ましや手助けや警告として存在すると理解されるとき、それはあってもなくてもよいという問題ではなくなる。むしろ事実として万人一いわゆる「健やかな心」をもった人びとを含めて⁽⁶⁾一を事実として巻き込んでいる事からであると言わなければならない。人間と世界は全体として「共に」生きていく努力をしない限り将来がないことは現在自明の理となっているが個々の宗教はこの根源的な事からを直視し誠実に関わることを通して人間にそのメッセージを送り続ける使命があると思われる。宗教的人間とは特定の宗教、宗派に属している人々を指すのではなく、この基本的なことを自覚している人を指すことになり、さらに本来そうであるように方向づけられている人間を言うのではないであろうか。

担当した年度の原論ではさまざまなテーマが扱われたがその大きなもののひとつは「つながり」というものであった。われわれを取り巻く多くいろいろなつながりに気づくことが学びの出発点となった。しかしながら原論では、つながり、つまり関係のいろいろな現象を指摘するにとどまらず「関係性の成り立つ根拠」⁽⁷⁾へと目を向けることが大切にされたように思う。「人間は、初めから関係性の中にあり、無数の関係に徹底的に依存している。しかも、無数の関係に徹底的に依存しながら、依存することによって自由であり、さらに自由な関

係を創造していくのが人間の生命である」⁽⁸⁾からである。つながりとつながりを可能とするものとは同じではない。つながりが成り立つ、あるいは回復する根拠がテーマになるときそこに本来の意味での「宗教」そしてキリスト教が発言する、またしなければならぬ場があると言える。

(二) 出会いと新生

以下では、『福音書』のテキストを材料にしながらつながりとその回復がどのように生起するのかを具体的に見てみたい。「徴税人ザアカイとイエスとの出会い」(ルカ19、1-10)の箇所である。—

「1 さて、彼は、エリコの中に入った後 [そこを] 通り過ぎようとしていた。2 すると見よ、ザアカイという名で呼ばれていた男がいたが、この彼は徴税人の頭で、彼自身、金持ちであった。3 そして彼は、イエスとは何者なのかを見ようとしたが、群衆のためにできなかった。彼の背が低かったからである。4 そこで前方に走り出て、いちじく桑の木に登り、イエスを見ようとした。彼がまもなくその道を通り過ぎるはずだったからである。5 さて、イエスはその場所に来た時、目を上げて彼に対して言った、『ザアカイよ、急いで降りて来なさい。私は今日、あなたの家に留まることになっているから』。6 そこで彼は、急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7 すると皆は、[これを] 見てつぶやき始めて言った、『彼は罪人である男のもとに入り、泊まろうというのだ』。8 一方ザアカイは、立ち上がって主に対して言った、『御覧ください、私の財産の半分は、主よ、乞食の者たちに与えます。また、私が誰かからゆすり取ったことがあるなら、四倍にして返します』。9 なお、イエスは彼に対して言った、『今日こそ、この家に救いが来た、なぜなら、彼もまたアブラハムの子だからだ。10 実に人の子は、失われたものを捜し、救うために来たのだ』⁽⁹⁾。

新約聖書、福音書は歴史上の一人物ナザレのイエスをキリスト(救い主)と信じた立場から書かれ編集されており⁽¹⁰⁾、史実をそのまま伝えようとしたものではない。しかしながら、聖書的な用語に関する簡単な解説と誠実な創造力—それはつなげる能力とも言える—があればそこに記述されている事からの本質的な部分を理解することは可能であると思われる。たとえそれらが「神話的」な表現を取っていたとしても。なぜならそれらのテキストは「人間の根源的な構造」に触れているからである。これはすべての「古典」と言われるものに共通する特徴でもある。

複雑になり過ぎ厳密になり過ぎた現代聖書学は生のテキストを分析し殺して

しまうこともあるが、本来の分析はそこに盛られている事からを生き返らす機能があるはずであり、そのことをもって読み手を思いこみの解釈から解放し、より深い人間理解へと導いてくれるはずである。聖書解釈書などを一応参考にはするが、「息が詰まるよう」な研究ではなく「もっとゆったりと伸びやかに」⁽⁴¹⁾このテキストを読んでみよう。

登場人物はイエス、ザアカイそして群衆である。彼らをAさん、Bさん、Cさん（たち）と呼んでも差し支えないが、ひとまず聖書の本文で見たい。テキストの流れのままに読んでまず見えてくるのは、「古い自己理解」―「出会い」―「新しい自己理解」という線である。テーマはだから「出会い」と「変化」⁽⁴²⁾にあると言えよう。「人は何によって変わるのか」とテーマ化してもよいだろう。ルカによる編集部分も含めてこの記事はひとつのまとまりとなしており、その意味でこの「テキストの中には余分なものは何一つない。すべては相互に結ばれて、あるテキストという一つの全体を形造っている」⁽⁴³⁾と言える。

まずザアカイという人物の自己理解を本文から読み取ることしよう。二節の「徴税人」という聖書用語がすでにそれを示している。『新共同訳聖書』の巻末の用語解説にはこうある、「ローマ政府あるいは領主（ガリラヤではヘロデ・アンティパス）から税金の取り立てを委託された役職。異邦人である外国の支配者のために働くばかりでなく、割り当てられた税額以上の金を取り立てて私腹をこやすという理由で、ユダヤ人から憎まれ、『罪人』と同様にみなされた」⁽⁴⁴⁾。つまり、この用語はすでに負の価値観を含んでいるのである。更に、「金持ち」であり「背が低い」という情報もある。後半では、「罪人」とも揶揄されている（七節）。これらのテキストからザアカイとその同胞たる群衆との関係そして彼自身の自己理解が浮かび上がってくる。生活には決して困っている訳ではないが何か疎外感を味わっているかもしれない一人の人間、自身に対して失望とは言えないまでも半ばあきらめに似た感情を抱いている人間が見えてくる。その彼が好奇心は旺盛らしく、群衆に混じってイエスを見ようとしている。イエスが見えなかったのは「背が低かったから」で「群衆のため」だとルカは書いているが、実は「群衆が彼をさえぎった」とは言えまいか。お前の来るところではない、と。四節の「そこで」は接続詞「kai そして」であるが、前後関係から「しかし、それにもめげずに」と訳したい。先回りしていちじく桑の木に上る彼の様子はユーモラスではあっても深刻さはないようである。木に登った結果、イエスを上から見おろし眺めることになる。何らかの理由で正面からは人と関われない、関わりたくない、しかし興味はあるという傍観者の姿をここに見ることができる。以上が四節までのザアカイの人物像である。

その場にやって来たイエスが木の上にいる彼を見上げて声をかける。「ザア

カイ!」。呼びかけられ、さらに「名」を呼ばれるときそこに関係が生まれる。なぜ、イエスは彼の名前を知っていたのかなどという疑問は「きつねは星の王子様に言いました」という文章に対して「きつねが人間の言葉を話すのだろうか」というような素直ではあるが、不要なある意味ではこの本質に迫ることを妨げかねない質問である。ここで問題になっているのは「名を呼ぶ」ことがどれほどの力をもってその人を直撃するかということであろう。イエスは続けて言う。「今日、あなたの家に泊めて下さい」。もちろんこれは「原文」通りの翻訳ではない。しかしこうでも訳さないとこの直後のザアカイの変化が理解できない。ルカの原文には「あなたの家に泊まらなければならない (dei)」という文章で、神の救いの計画は必ず実現するのだという神学的意味が込められており⁽¹⁵⁾、それはそれで一つの理解ではある。そしてそう表現することで神学的には整合性を持つかもしれない。しかしそのことが逆にイエスという人間の生の迫力、自由さ、暖かさ等をそぎ落とすことにはならないか。傲慢な口調で命令を下し、勝手に他人の家に入り込んでいくイエスではなくて、ネガティブな自己理解を持っている人間に対して、先入観や周囲の雑音に惑わされることなく、依頼という形で自分を差し出す人間の姿がここにあるのではないか。

ザアカイは「急いで」降りて来て「喜んで」イエスを迎えた。この二つの副詞が彼の変化の様子を示している。これに群衆のつぶやきが続く。いわゆる史実の部分はこの七節で終わっていたとみることもできる⁽¹⁶⁾が、ひとは何で変わり、そしてどうなるのかをみるためにルカの編集（つまり解釈）も参考にしよう。群衆の非難中傷にもかかわらず、ザアカイは「立ち上がり」自分の財産を貧しい人たちに分け与え、不正は償うと宣言した。「四倍にして返す」という言い回し⁽¹⁷⁾や「半分を施す」という表現でルカはここで富みと富む者に対する態度を示している、とされる。九一十節の言葉もイエスの存在の意味をルカが聖書的用語で要約したものと理解ができるが、問題はこのような関わりあいや言葉がそこでやり取りされる構造である。「立つ」という語はこの福音書と使徒行伝とにおいては強調的意味があるので、「毅然として立ち」とか「すくと立ち」と訳され得るが⁽¹⁸⁾、ここはザアカイの存在の変化の表現と考えることができる。人間はある人間（人間とは限らないが）との間に本来の関係が成立するとき「立ち上がる」、非難に囲まれていても「毅然として」いることができるのではないか。イエスの無防備なかわりと受容が彼を負の自己理解とその悪循環から正の自己理解と積極的な他者とのかわりへと解放した、と言える。また、ザアカイの動きのプロセスから見ると、まず木の「上から」イエスを観察していた彼は呼びかけられて「下へ」下りてきて（おそらく膝まずいてイエスを見上げ）、最後に立ち上がってイエスそして群衆と「向き合う」という構図が浮かびあがってくる⁽¹⁹⁾。ザアカイという名はヘブライ語で「正しい者」「清い者」の意味であるが⁽²⁰⁾ここで他者からの呼びかけによって彼はその本来の名を取り戻したのである。

(三) 本来性を生きる学びを

人間関係科の学びはキリスト教的人間理解に基づく教育であるとの明確な提示がある。ここでの人間関係の学びは所謂つき合い方のテクニックを直接に目指すものではないから体験学習の結果として通常の意味でのかかわり方が「下手になる」ということも一時起こり得るが、それは聖書のテキストで言えば、イエスのようなあり方を追求することを共通の課題とするからである、と私は考えている。そのような無防備なかかわり方が「どこから」可能となるのかを理論的にも実践的にも追求していくことが基本的に大切であると思う。これが「原論」に課せられた課題であろう。この課題と取り組むときキリスト教のメッセージはある意味を持つのではなかろうか。それはしかし整備され固定化された教義で発想を縛るというのではなく、われわれがその上で共に生かされている根拠そのものへ目を向けさせることによってわれわれにひとつの方向性を示し、励ましを与えるという意味においてである。それは「全体」という視点、つまりわれわれをすでに包み込んでおり癒そうとして「ある」存在⁽²⁾に自らを開かせるものでもある。この存在に百パーセント自分を開いた人間のありかたをザアカイに声をかけた人物が示している。本来の関係のあり方、回復は超越的契機に自分を開こうとしない人間的な操作では決して可能とはならないであろう。そのような意味において「人間関係科原論I、II」が本来の「宗教性」をその背後に持つのはむしろ当然だと思われるのである。(1997・2・28)

(注)

- (1) 津村俊充・山口真人編／南山短期大学人間関係科監修『人間関係トレーニング』ナカニシヤ出版、1993年(3刷)5-10頁など参照。
- (2) 宗教の定義は宗教学者の数だけある、と言われるが、W. R. コムストック『宗教—原始形態と理論』(柳川啓一監訳)東京大学出版会1978年(2刷)32-52頁、小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会1978年(5刷)255-263頁が語源、定義などに関して簡潔な要約をしている。後者によれば「最も原初的には、なにか不思議な事物に接したときの畏敬や不安や疑惑の感情をさしたという。のちにはこうした感情を引き起こす対象や、その対象に対する態度行動としての儀礼など意味するようになった」ということである(脇本平也、256頁)。しかしながら、宗教現象をめぐるより厳密で出発点となる論及の一つはおそらく、R. オットーの『聖なるもの』(山谷省吾訳)岩波書店1976年(6刷)であろう。
- (3) 阿部正雄「宗教における不可逆性の問題」八木誠一・阿部正雄編著『仏教とキリスト教—滝沢克己との対話と求めて—』三一書房、1981年、121-

171頁参照。

- (4) 八木誠一が「史学・解釈・実論論」『聖書のキリストと実存』新教出版社(1973年3版192-217頁)で提示しその後『仏教とキリスト教の接点』法蔵館(1975年)の序説でも展開している、S(事柄自体) - L(文献) - I(解釈者)という解釈学の視点は諸宗教間の対話を成立させるための理論的基礎を与えると共に、それぞれの宗教の内部においてもその独自性と存在意義を明確にさせるための重要な視点である。
- (5) E. フロム『精神分析と宗教』(谷口隆之助・早坂泰次郎訳)東京創元社、昭和59年(26版)15頁よりのS.フロイトの宗教観の一部である。なお、キリスト教神学者H. キュングは『フロイトと神』(鈴木昌訳)教文館1987年においてフロイトの批判すべき点と評価すべき点をまとめており(128-136頁)、精神療法にとっての宗教の重要性を、ユング、フロム、フランクフルに言及しながら述べている(137-151頁)。そして「今日において重要なのは、人生を楽しんだり何かをやりとげたりする能力を取り戻すことだけでなく、むしろ、人生の真の意味と自的とを取り戻すことではないだろうか」と言う(148頁)。
- (6) 藤田富雄「宗教の意味を求めて—宗教的シンボルによる試み—」同氏編『講座宗教学4・秘められた意味』東京大学出版会、1981年(2刷)1-74頁は平凡にわれわれが生きている日常生活と「日常的思考」の立場をつきつめていくと「宗教の世界」が開けてくることを示している。また、阿部利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』(ちくま書房1996年)は、日本人が決して宗教心を持たない訳でなく、「創唱宗教」と「自然宗教」とを混同することからくる誤解であると述べるなかで「近代日本の歴史が、大勢からいえば、痩せた宗教観を生み出すにとどまった。・・・宗教観が痩せているということは、人間についての見方が浅いということにもなる。人間についての浅い見方しかできないと、人間の引き起こす深くて巨大な問題に、お手上げになってしまう」と書いている(112頁)が正当な指摘であろう。
- (7) 石井誠士『癒しの原理—ホモ・クーランスの哲学』人文書院、1995年、145頁。
- (8) 同上。
- (9) 邦訳は種々あるが、荒井献・佐藤研訳『新約聖書Ⅱ・ルカ文書・ルカによる福音書、使徒行伝』岩波書店、1995年を使用した。文中での「ザカイオス」は「ザアカイ」に変えた。なお、この翻訳を使用した理由の一つは「敬語」が抑えられていることである。典礼の場で朗読されるテキストはそれなりに整えられて然るべきであるが、敬語がテキストの雰囲気を変えてしまうこともある。この点に関して、イエスがエルサレムの最高会議(サンヘドリン)に取り調べを受ける場面でのやり取りを再現した田川建三の見事な試訳がある(田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房、19

97年、632-633頁)が、このような翻訳は氏が再三指摘しているように、言葉をその歴史の中へ戻すことによって生まれてくるのであろう。

- (10) ある立場に立つとはそこに排他的にしがみつくことではない。「(イエスを)本当に大事にするということは・・大事にしすぎることとは全然別のことなのです」という簡潔きわまりない言葉で、滝沢克己は人間が人間であることへの「目覚め」の必要性を訴えている。一連の著作でも同様。ここに引用は星野元豊他『畢竟一滝沢克己の原点志向をめぐって』法蔵館、224頁より。
- (11) 大貫隆「福音書の『要約的報告』とは何か一面白くない箇所を面白く読むために」『福音と世界』(1993年10月号)27-37頁中32頁の言葉であるが以前にも「過度の首尾一貫性を求める」研究状況に対して疑問を呈しており(青野太潮・大貫隆「テキストと神学と外部」『哲学』12号[1991年]52-74頁中54頁など)、同感である。もっとも大貫氏自身は厳密で誠実な研究者であるが。確かに、素朴な例で言っても、一つの単語に一つの意味だけを読み取らなければならない、ことはないであろう。あるいは一つの単語ですべての人が同じ意味を理解するとは限らない。また、読みは同じテキストでも毎回が「新しい」読み行為である。意味の広がり、発見、深まりを法則で規制することはできない。一貫性が必要だと言うなら、それはテキストの状況、自らの状況に対する「誠実さの一貫性」であろう。
- (12) R. C. レスリー『イエスとロゴセラピー—実存分析入門』(萬代慎逸訳)ルガール社、1985年(3刷)29-45頁中36頁。
- (13) W. ヴォーゲルス『「構造分析」と司牧—ザカイオスの物語(ルカ19、1-10)』(瀬本正之訳)『神学ダイジェスト』49号(1980年)99-112頁中102頁。
- (14) (35頁)
- (15) S. Shulz, Gottes Vorsehung bei Lukas, in; ZNW 54 (1963) 104-116。三好迪、『旅空に歩むイエス—福音書のイエス・キリスト3—ルカによる福音書』講談社、昭和59年211頁。
- (16) 三好迪、上掲書、210頁。
- (17) 「不正な取り立てに対して四倍にして返すというのは、旧約の慣習法(出エジプト22、1、サムエル下12、6)だけでなく、一世紀の歴史家ヨセフス(『古代誌』第十六卷一、三)にも知られている。上掲書同頁。
- (18) フランシスコ会聖書研究所訳『ルカによる福音書』昭和45年版では「きぜんとして立ち」(200頁)と訳されたが、改訂された合本(1987年5刷)では「すっと立ち」(262頁)となって動きが見えるような訳に工夫されている。
- (19) このテキストは『カウンセリング的対話』のコースでも扱ったが、この指摘はその際の共同担当者であった心理療法家、木村晴子さん(現在、甲

南大学教授)からのものである。

(20) フランシスコ会聖書研究所訳(昭和45年版)199頁の注(3)参照。

(21) K. リーゼンフーバー「存在への傾聴—現代哲学と瞑想」門脇佳吉編『瞑想について』創元社、1982年、62-88頁。